

2. 奈良町の価値

奈良町の街区割・町割や辻子に平城京の外京^{げきやう}であった当時の条坊制の名残をとどめ、そこには数多くの寺社や町家が残し、伝統的な町並みを現在に伝えています。また、奈良町の町家で営まれてきた一刀彫・晒・酒・墨などの伝統工芸や産業、軒先に吊るされた「身代わり申」にみる庚申信仰や地蔵信仰などの民間信仰による伝統行事など、歴史・文化・伝統が日々の暮らしの中に生きながら受け継がれています。

ここでは、主として明治 31 年（1898）に奈良市として成立するまでの奈良町の成り立ちから奈良町の歴史性を、奈良町の基盤となる町割りや町家、文化財と当時の人々の暮らしから奈良町の空間的特徴とそこで展開される生活（暮らし）の特徴を整理し、さらに、昭和後期以降から奈良町で展開されているまちづくりを見ていくことで、奈良町の奈良町たる価値を整理します。

2-1. 奈良町の成り立ち

（1）奈良町のあゆみ

■ 奈良町の基盤の形成

古 代

和銅 3 年（710）に藤原京から平城京に遷都され、以後 70 余年の間、奈良は都として栄えることになりました。平城京は、東西 32 町（約 4.3km）、南北 36 町（約 4.8km）を占め、北端中央に平城宮を設け、京城は、羅城門から朱雀まで南北に走る朱雀大路の東側を左京、西側を右京とし、10 条の東西道路と左京両京にそれぞれ 4 坊ずつの南北大路で碁盤目状に区画しました。これらの区画は坊と呼び、各坊はさらに東西・南北に 3 本ずつの小路で 16 の坪に区画し、町割りを形成しました。この京城の東端を南北に通る四坊大路の東側に、二条から五条まで 3 坊ずつ区画が広がっていて、この部分だけ東に張り出すようなかたちをしています。この範囲が、一般的に外京と呼ばれていますが、奈良町はこの地に発展し、この当時の町割りが今も痕跡として残されています。

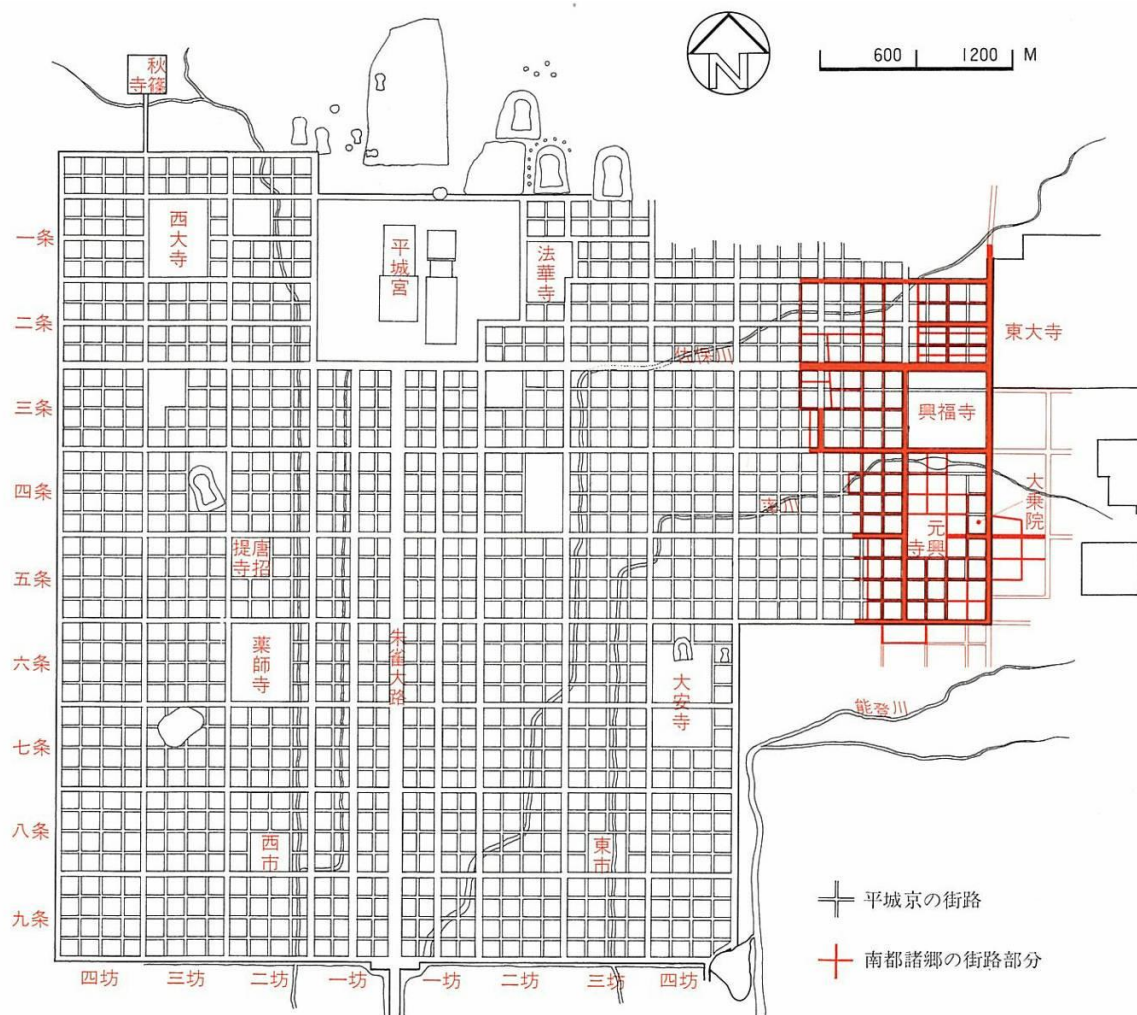
興福寺、薬師寺、元興寺、大安寺などの官寺や紀寺（紀氏）などの私寺が飛鳥から平城京に移り、養老 4 年（720）には 48 寺を数えたといわれています。さらに、新たに数多くの寺社が京の内外に創建され、新薬師寺及び般若寺、手向山八幡宮、春日社もこの平城京の時代に創建されました。

■ 門前郷から商業の町への展開

中 世

都が長岡京^{うつつ}に遷ると、平城京は荒廃していきしましたが、寺社はそのまま残されたため、奈良は寺社の都として生まれ変わるようになりました。なかでも全国の寺院の総本山として特別の扱いを受けた東大寺と、藤原氏の氏寺として厚く保護された興福寺は高い勢力を保持しました。さらに、それらの子院には貴族の子弟が入り、特に皇族や摂関家の子弟が入った興福寺の一乗院と大乘院の両門跡が有力でした。また、興福寺は保延元年（1135）に春日若宮社を創祀し、翌年から若宮祭（おん祭）を始めるなど、春日社との一体化が進み、神威を掲げて大和一元の末を末寺化し、大和の行政権を握りました。

平安末期の 11～12 世紀頃から、寺社の発展に伴い寺社の雑務に携わる人が増加し、寺社の周り



平城京と奈良町の関係

(出典：『図集 日本都市史』(編集：高橋康夫・吉田伸之・宮本雅明、伊藤毅)(東京大学出版会、1993年))

に彼らの居住地が数多くつくられ、寺社の周りには郷(門前郷)と呼ばれる「まち」が形成されていきました。東大寺、興福寺、春日社、元興寺の周りの郷は、次第に発達して、現在の奈良町のもとになっていきました。

奈良の郷は治承4年(1180)の平重衡による南都焼討により全滅に近い被害を受けましたが、復興が進むなかで、以前よりも人や物資が集まることにより郷を細分化させた小郷が形成されました。さらに、郷内では市が開かれ、こうした市における商業活動により新たな郷が次々と生まれ、郷民の経済力も高まっていきました。このような郷の発展とともに、郷民が社寺の祭礼にも参加するようになり、氷室社、漢国社、率川社や元興寺の御霊社などの祭礼等の郷民の祭礼が生まれました。また、応仁の乱(1467~1477)後、興福寺がかつての威勢を失うなかで、社寺の支配から離れて自立した町民があらわれるようになり、彼らは「奈良町人」と呼ばれ、京都や堺との交流を深めながら自治の意識を強めていきました。

永禄2年(1559)に松永久秀は^{まつながひさひで}大和北部の筒井順慶を破り、奈良を勢力下におき、翌年^{みけんじやま}眉間寺山に^{たもんじょう}多聞城を築きました。多聞城は四



中世の奈良の町

(出典：上野邦一『なら・まち・みらい』(財団法人世界建築博覧会協会、1992))

層の櫓を備えた壮観なもので、久秀は勢力をますます高める一方、三好三人衆と対立し、東大寺・興福寺を挟んで合戦を繰り返しました。永禄 10 年（1567）、三好・松永の乱により大仏殿は大仏ともに焼け落ち、天正元年（1573）、久秀は織田信長に反して敗れ、信貴山城に退きました。その後、天正 2 年（1574）に織田信長が多聞城に入ったことが知られていますが、天正 4 年（1576）に信長により取り壊しが命じられると、多聞城は築城から 20 年足らずで破却されました。

戦国末期のこうした争乱で数々の寺院や町は焼亡し、寺社の権威は弱まりましたが、その一方で寺社からの自立性を強めた町民は自治組織を形成し、商工業の発展に努めました。

～ 奈良町の郷 ～

『奈良』（永島福太郎著）によると、奈良町には次の郷があったとされています。

大乘院門跡郷

本郷 …南市、岩井、北鶴、南鶴、公納堂、川上、辰巳小路、法乗院、野田、花園

寄郷 …東中院、西桶井、東桶井、窪、十輪院、幸、宮馬場、松谷、今辻子、春日見、御所馬場、毘沙門堂、極楽坊、不審辻子、光明院、瓦堂、木辻子

元興寺郷 …東鳴川、蔵下、高御門、東寺林、西寺林、辰巳辻子、無縁堂、南室、北室、小南院、中院、極楽、坊辻子、今御門

東大寺郷

…転害、今小路、宮住、中御門、押上、南院（水門）、北御門（以上、東大寺七郷）、今在家

東南院門跡郷

興福寺郷

寺門郷（南都七郷）

南大門郷…東城戸、西城戸、脇戸、高御門、鳴川、花園、井上

新薬師郷…京終、中辻子、紀寺、貝塚、下高畠、上高畠、新薬師、丹坂

東御門郷…南院、中村、登大路、東郷、芝、西野田、東野田、北野田、重持院

北御門郷…菖蒲池、上北小路、下北小路、南法蓮

六口郷 …苅坂、高天、阿弥陀院、内侍原、二条、東芝辻、西芝辻

西御門郷…小西、角振、林小路、高天、苅坂、今辻子

不開門郷…今辻子、下三条、上三条、角振、椿井橋爪、橋本、餅飯殿

一乗院門跡郷…紀寺、堯光院郷、芝辻、西御門、北市、船橋、新在家、法蓮（北法蓮）、広岡、阿古屋川、

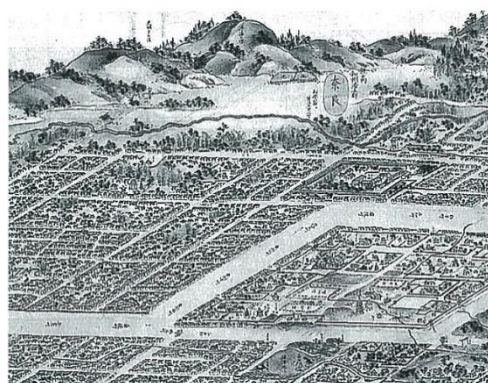
佐保田、不退寺、東里

■ “奈良町” の成立

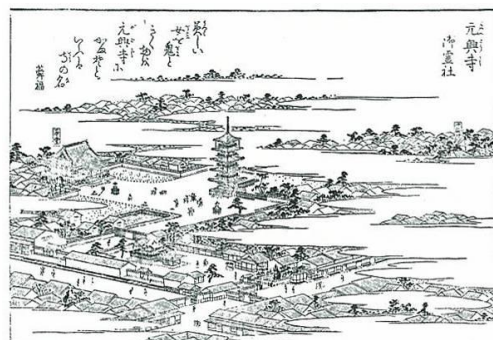
近 世

関ヶ原の戦いの後、慶長 8 年（1603）に徳川家康が江戸で幕府を開く前後に、大和の統轄者に任命した大久保長安に屋地子帳改めを行わせ、同 9 年（1604）には町域が確定し、奈良の諸郷は町と称され 100 町が成立しました。このとき、豊臣秀吉による文禄検地でいったん町から切り離されていた周辺の半田村庄屋の支配であり、半田方と呼ばれていた 25 村も地方町として編入され、それぞれ町と称することが公認されました。

慶長 18 年（1613）に奈良奉行が設けられ、高畠・紀寺・木辻・三条の諸村をはじめ、寺社の境内地や領地も地方町に準じて扱われ、やがてそれらの中から新たな町も生まれました。さらに、奈良町をとりまいて、幕府領である城戸・油坂・杉ヶ町・芝辻・法蓮・京終・川上・野田のいわゆる「奈良回り八か村」がありましたが、これらの村も奈良奉行の支配下にあったので、それらを含めて広義の奈良町（総



江戸時代の奈良町（加太越奈良道見取絵図）
（画像提供：東京国立博物館）



元興寺周辺の町並み（大和名所図会）

数 200 余町) が成立しました。境域は、東は市ノ井から西は三条口まで 26 町 44 間余、北は奈良阪京口から南は^{くぬぎ} 口まで 1 里 4 町 50 間に及び、奈良町への 11 か所の入口には木戸が設けられました。17 世紀末には奈良町は 205 町となり、もっとも賑わいをみせた元禄期には人口 3 万 5 千人余にもなりました。

～ 奈良町の 205 町 ～ (『奈良町役名付帳』(享保 3 年、高木又兵衛控) より)

大和国添上郡之内 205 町

奈良町

油留木町、押上町、南半田東町、北半田東町、川久保町、今小路町、中御門町、東笹鉾町、東包永町、手貝町、西手貝町、川上出屋鋪町、東之坂町、北御門町、今在家町、野田町、興善院町、奈良坂町、鶴福院町、不審ヶ辻子町、中院町、鶴町、公納堂町、福智院町、十輪院畑町、十輪院町、川之上突抜町、川之上町、築地之内町、納院町、薬師堂町、毘沙門町、芝突抜町、紀寺町、中新屋町、芝新屋町、元興寺町、井上町、中辻町、脇戸町、高御門町、陰陽町、西新屋町、三棟町、木辻町、鳴川町、花園町、瓦堂町、京終町、京終地方東側町、京終地方西側町、城戸村、南城戸町、南中町、南袋町、南風呂町、小太郎町、南新町、柳町、南魚屋町、杉ヶ町、東寺林町、西寺林町、今御門町、池之町、南市町、元林院町、橋本町、樽井町、餅飯殿町、光明院町、下御門町、勝南院町、北室町、阿字万字町、東城戸町、椿井町、角振町、角振新屋町、上三条町、奥子守町、寺町、北向町、本子守町、小川町、西城戸町、北風呂町、馬場町、東向南町、東向中町、西御門町、小西町、林小路町、高天町、漢国町、中筋町、東向北町、大豆山町、大豆山突抜町、坊屋敷町、花芝町、宿院町、鍋屋町、半田突抜町、北小路町、南半田西町、南半田中町、北半田西町、北半田中町、半田横町、押小路町、後藤町、北魚屋東町、北魚屋西町、西笹鉾町、北川端町、北袋町、西包永町、高天市町、高天市百姓方、坂新屋町、奥芝町、西新在家号所、西新在家町、東新在家町、菖蒲池町、内侍原町、芝辻町、畑中村、船橋町、北市町、北市地方町、北法蓮町、円慶屋鋪、下三条町、今辻子町、百万ヶ辻子町、西之坂町、油阪町、油阪地方町

大乘院御門跡境内

北天満町、片原町

南都興福寺下

三条村…今井町、細川町、三条横町、三条東町、三条西町、弥勒堂町、三綱田町

木辻村…浄言寺町、中町、瓦町、五軒町、八軒町、十三軒町、綿町

紀寺村…田中町、草小路町、中通町、新屋鋪町、七軒町、紀寺東口町、笠屋町、六軒町、十輪院町、地藏町 下清水南側町、上清水四軒町

清水村…上清水町、中清水町、下清水町、中天満町、久保町、上清水横町

登大路村…登大路町

南都興福寺 下入組

春日社家并祇宜

高畠村…破石町、松南院横町、西福井町、東福井町、下高畠町、關伽井町、頭塔町、高井町、丹坂横町、上清水二軒町、高畠町、上高畠町、新薬師町、松南院町、客養寺町、勝願院町、新開町、丸山町、丹坂町、北之大道町、東野田町、西野田町

南都東大寺下

水門村、野田村、雜司村

南都東大寺観音院

同般若寺 下入組

般若寺町

南都御朱印寺十三ヶ寺下

肘塚町、櫛町、竹花町

■ 観光都市としての発展

近代～現代

戦国期の戦火により原形を留めないほどに溶け崩れた東大寺大仏は、その後約 120 年間雨ざらしの状態が続きましたが、貞享元年(1684)に幕府の許可がおりると、公慶上人による全国勧進行脚により復興事業が進められました。同年 3 年(1686)から修造を開始し、元禄 5 年(1692)に大仏の修造が完成すると大仏開眼供養が営まれ、大仏殿も宝永 6 年(1709)に落慶されました。開眼の盛儀には諸国から 20 万人余が参詣し、奈良町は繁盛を極め、これを画期として、奈良町は産業の町から観光の町へとその姿を変えていきます。

慶応 3 年(1867)の徳川慶喜による大政奉還により、奈良奉行所は開設以来 250 余年で閉ざされ、明治元年(1868)閏 4 月に公布された、地方行政を府・藩・県の三治の制²とする政体書に基づき、

² 旧幕府領を府または県として新政府の直轄とし、藩は従来どおりとするもの。

同年 5 月 19 日に奈良町とその他の村々³は「奈良県」に編成されました。明治 4 年（1871）7 月の廃藩置県や全国の編成替えに伴い、同年 10 月 22 日にはその範囲を拡大し、大和全域を管轄する統一「奈良県」⁴が成立しました。

明治 9 年（1876）4 月 18 日の府県廃合の方針により奈良県は廃止されて、堺県に合併され、明治 14 年（1881）2 月 7 日には堺県が大阪府に合併されました。しかし、合併後の府行政は、もっぱら摂津・河内・和泉地方の河川や港湾の改修に重点が置かれ、奈良町や大和の住民が望んでいる道路改修、治山、治水、産業の興隆、学校や医療の改善などはなおざりにされる傾向にありました。そこで、同年の暮れから有志による奈良県再設置運動が始まり、その運動は苦難の連続でありましたが、明治 20 年（1887）11 月 4 日によりやうく奈良県の再設置が決まり県庁は旧奈良師範学校があてられました。その 4 か月後の明治 21 年（1888）4 月に「市制・町村制」が公布され、県庁の所在地となった直後のことであり、多くの人が市制の施行を望んでいました。しかし、当時の奈良市街及び接続村の人口は 2 万 4632 人であり、市制施行に必要な 3 万人を大きく下回ったことから、翌年 4 月 1 日、奈良市街と接続村を合わせた 14 か町村⁵による「奈良町」が成立しました。



明治中期頃の奈良町（復元模型）

一方で、明治元年（1868）の神仏分離令（廃仏毀釈）により疲弊した奈良町を復興するための明治 7 年（1874）の奈良博覧会の開催や、荒廃した興福寺境内の整備による明治 13 年（1880）の奈良公園の開設、明治 23 年（1891）の倭馬車会社による乗合馬車の営業、明治 23 年（1890）から始まった大阪鉄道会社による相次ぐ鉄道開通により、奈良町は観光都市として進展していきました。その後も、商工業の勃興、奈良公園の拡張整備、明治 28 年（1895）の帝国奈良博物館の開館等により、日清戦争（明治 27～28 年（1894～1895））頃から戸数・人口とも急増し、明治 29 年（1896）には戸数 5,435 戸、人口 2 万 9,498 人を数えるようになり、明治 31 年（1898）2 月 1 日に「奈良市」が誕生しました。当時の奈良市は旧奈良町の範囲（面積約 23.8 km²）であり、大正 12 年（1923）4 月 1 日の添上郡佐保村の合併以降、市域を拡大していきますが、奈良市の原点は奈良町であるとともに、奈良町における地方自治が現在の奈良市の礎を築いています。

ところで、奈良の風土と文物に心引かれて奈良を訪れる文人も多くみられました。昭和 4 年（1929）から同 13 年まで高畑に居を構えた志賀直哉のもとには作家、画家、彫刻家などの多くの文人が集う高畑サロンが華開きました。また会津八一、亀井勝一郎などの文人の定宿であり、古代史、仏教美術、寺社建築などを学ぶ学生を育てた奈良の芸術院・学士院と呼ばれた『日吉館』⁶も奈良町の歴史の足跡として大切です。

³ 奈良回り八か村や近傍の村々、明治・東里地区の大半の村々、春日社・興福寺・東大寺など社寺領下の村々などのかつての添上群西部の大半や、秋篠村の大部、現在の佐紀町などが含まれる。

⁴ 奈良県、五条県、廃藩置県により県名をとなえることとなった元々大和にあった 8 藩（郡山・柳生・小泉・高取・柳本・芝村・櫛羅・田原本）及び大和に所領をもっていた津・久居・和歌山・壬生・大多喜の各藩の 15 県による。

⁵ 従来の 5 つの連合戸長役場管理区内の町村。（ただし、法華寺村と合併して独立維持の見込みであった法蓮村・半田開町を除く。）

⁶ 田村キヨノが昭和 8 年（1933）に女将となり、以後、平成 7 年（1995）に閉館するまでの 62 年間、女将として多く著名な学者、文化人の宿泊の世話をし、有為な学徒を育てた。

【ポイント】

- ・奈良町は、古代・中世・近世・近代の歴史が重層する寺社と一体となった歴史都市です。
- ・奈良町のコミュニティは中世の郷に形成され、時代の変遷を経ながらも現在に受け継がれています。
- ・奈良町の先人達は、戦火、廃仏毀釈などで大打撃を受けた奈良町をよみがえらせる逞しい復興エネルギーをもっていました。
- ・奈良町は、町人や文人墨客等のサロン文化を育みました。
- ・現在の奈良市のルーツは奈良町です。

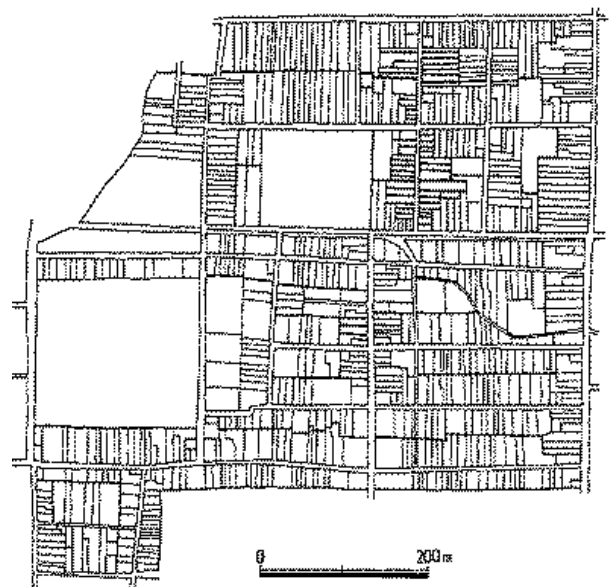
（２）奈良町の空間的特徴と人々の営み

■ 奈良町の空間的特徴

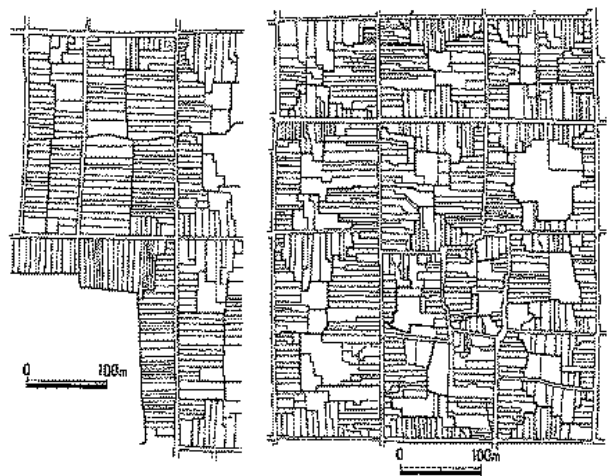
町割・敷地割

奈良町の街区は、平城京の条坊を下敷きとしてできており、東西・南北に等間隔に並ぶ 1 辺約 130m の碁盤目状の街区に区切られています。現在の奈良町の街区も、一部形成過程や時期によって異なるものの、基本的に 1 辺約 130m の正方形か、それを複数あわせた形になっています。

奈良町では、道路を挟んで両側に向かい合う家々によって町が形成されています。そして、その敷地割は、間口が狭く奥行きが深いことが特徴です。できるだけ多くの家が表通りに面して建てられるように、また、江戸時代には間口の広さによって税金を課税したことに対しても、この敷地割は理屈にかなっていたといえます。一方で、中世に奈良の郷内にあった地域のうち、その後農地化した地域では、地形や水利の便に合った地割に変えてしまったために、中世の敷地割や町割りとはほとんど残っていません。したがって、奈良町における敷地割の中世以来の原則は、町中であつたがゆえに大きな改変を加えることができず、高度経済成長期を迎えるまで大きな都市開発のないまま現代まで保持されてきたといえ、こうした敷地割にこそ、都市的な居住にふさわしい極めて合理的なあり方であったことを示しています。



興福寺北方の敷地割



元興寺西南部（左）近辺（右）の敷地割

※明治 23 年地籍図による（出典：奈良市教育委員会「奈良町（Ⅰ）（元興寺周辺地区）昭和 57 年度伝統的建造物群保存対策調査報告書（1983）」）

町家

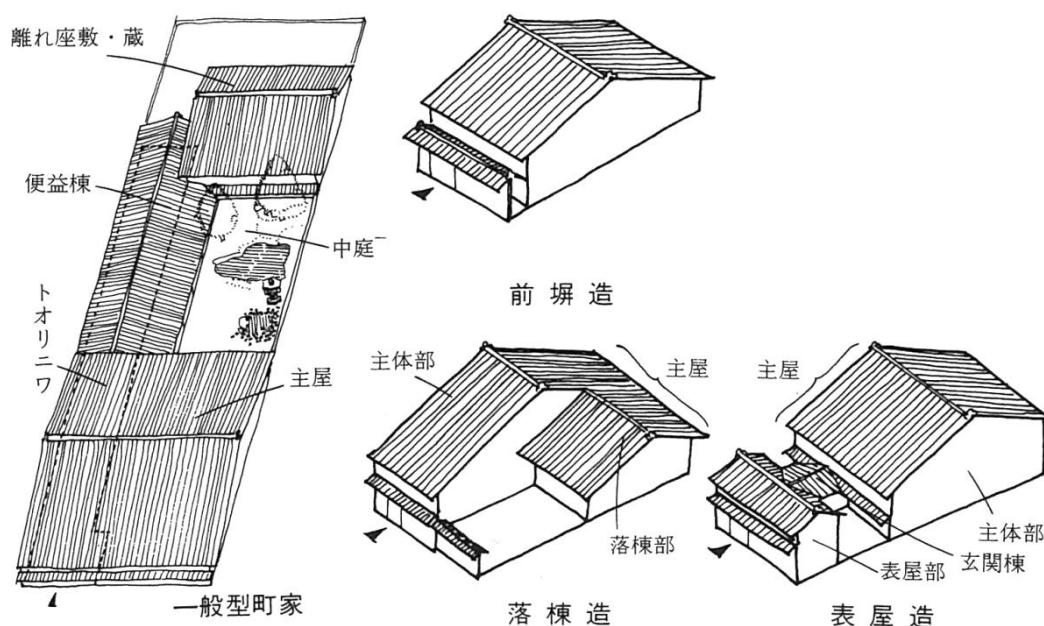
奈良町においては、間口の狭い敷地を有効に使うために、間口いっぱいに切妻平入りの屋根を架けた町家が建てられ、それらが連続することで歴史的な町並みを形成しています。

町家の構造は、通りに面して平入り、切妻造りの主屋を建て、表から奥へ通ずる土間（トオリニワ）と、それに沿って主屋の部屋が「ミセノマ」「ナカノマ」「オクノマ」と奥行方向に一系列に並び、その後ろに中庭を設け、離れや土蔵を渡り廊下でつないでいます。また、間口方向に増築する場合、増築部を落ち棟構造とする特徴があります。表に庭がない代わりに設けられた中庭は、主屋の奥行がほとんど統一されているため中庭の位置が揃い、外からの視線を気にすることなく、より良い条件で通風や採光を確保することができるため、町家の大切な要素となっています。

町家の正面は、虫籠窓^{むしこ}と格子で構成され、奈良町の格子には「米屋格子・酒屋格子」と呼ばれる太い角材を使ったものが多くみられます。また、「奈良格子」や「法蓮格子」と呼ばれる丸太を用いた素朴な格子は奈良の民家の特徴であり、町に来た鹿を傷つけないために「鹿格子」とも呼ばれています。格子は、風や光を採り入れ、外からの視線をほどよく遮ることで防犯上有効であるとともに、外と内を適度につなぐ役割を果たしています。虫籠窓^{むしこ}は、庇上の壁に設けられ、防火に備えつつ採光と通風を図るもので、さまざまな意匠がみられ、家の個性を表す大きな要素となっています。

また、奈良町の周縁部には、典型的な町家の外観でありながら、土間部に煙返しと呼ばれる梁を低く架けた、奈良盆地の農家に一般的にみられるのと同様の内部空間をもつ農家住宅がみられます。とりわけ、法蓮の農家は、通りに面して切妻平入りの茅葺の主屋を建て、正面には太めの磨き丸太を半割にした法蓮格子を設けたもので、法蓮づくりと呼ばれています。

奈良町の町家には、自然とうまく付き合いながら自然を楽しむ日本の暮らしの生活文化や、限られた土地や空間を十分に生かし、プライバシーを守りながら、快適な生活環境を確保する生活の知恵や工夫が生きており、人々が住み続けることで、町家での暮らしが継承されています。

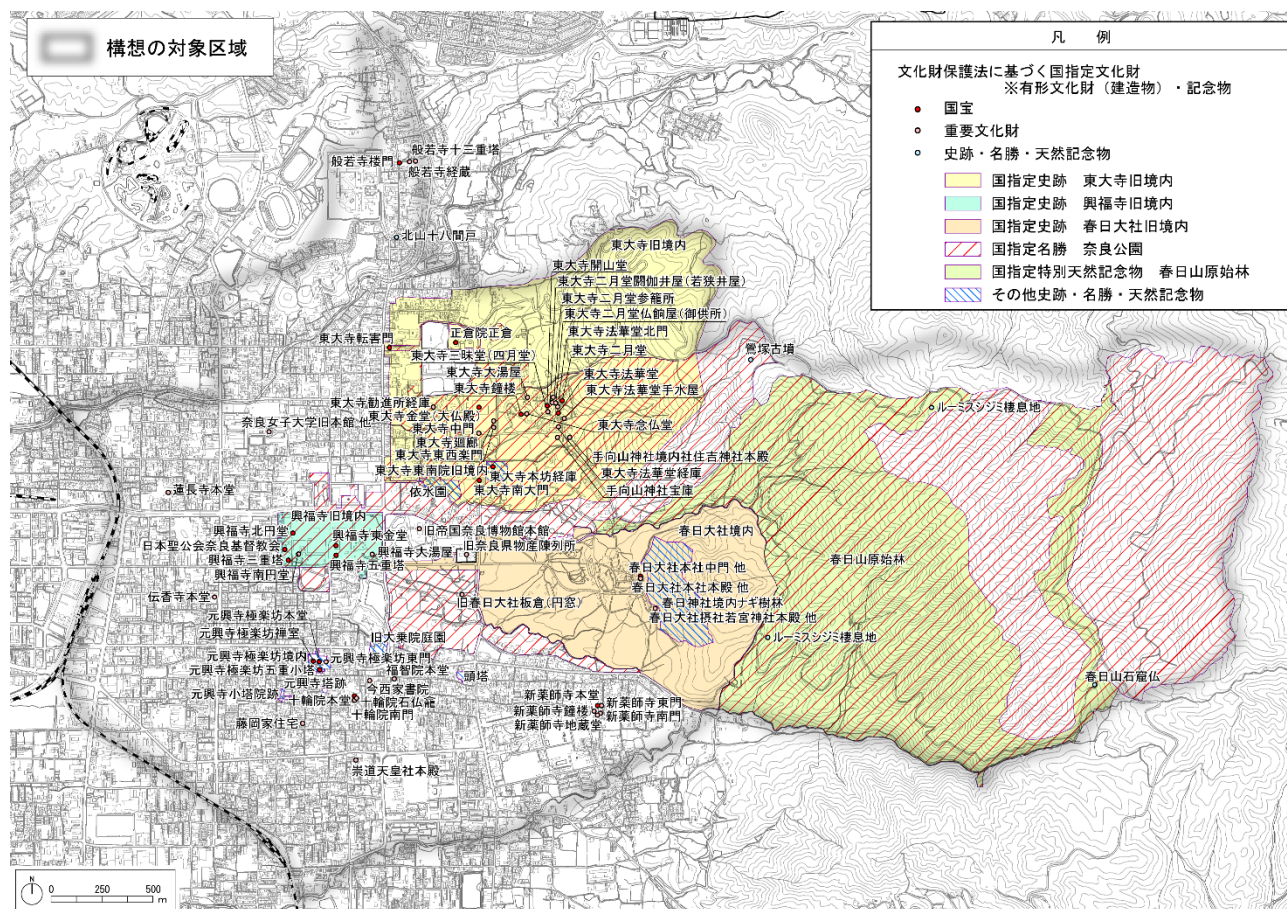


奈良町の町家の呼称

(出典：奈良市教育委員会「奈良町（Ⅰ）（元興寺周辺地区）昭和57年度伝統的建造物群保存対策調査報告書（1983）」）

文化財

奈良町には、歴史上価値の高い建造物や史跡などの文化財が数多く残されています。文化財保護法、奈良県文化財保護条例（昭和 52 年（1977））、奈良市文化財保護条例（昭和 53 年（1978））に基づき指定・登録されている文化財の件数は、平成 28 年（2016）12 月現在、国指定が 509 件、県指定が 54 件、市指定が 50 件、国登録が 60 件です。また、奈良町に居住する保持者による国選定保存技術が 2 件あります。これだけ多くの文化財が残っていることは、先代の住民がいかに文化財を大切にして守り続けてきたかを物語っていると同時に、奈良町全体として歴史的価値が高く、文化財と共存するまちであることを示しているといえます。



国指定文化財（有形文化財（建造物）・記念物）の分布

奈良町における人々の営み

伝統工芸と伝統産業

中世の奈良町は、寺や神社と結びついた手工業が発展し、商工業のまちとして発展してきましたが、江戸時代を迎えて産業都市としてめざましい発展を遂げます。おもな産業には、晒や酒造、墨、甲冑、一刀彫などがあり、貞享 4 年（1687）の『奈良曝』によると、奈良晒関係では晒問屋 32 軒をはじめ、業者 110 軒、布仲買 6,700 人を数え、具足・刀剣の鍛冶や商人などの武具関係者は 116 人、酒屋は 25 軒、墨屋は 9 軒と、このころの奈良町が、まさに奈良晒・武具・酒・墨の町であったことをうかがうことができます。

しかし、酒や武具は早い時期から衰退し、産業都市奈良の支柱であった奈良晒もまた、越後縮や

近江麻布（野洲晒）などの「他国布」の台頭に伴い、中期以降次第に衰えていきました。このように、産業の町としての発展は江戸時代中頃でとどまり、そのかわり寺や神社に参詣する人々が増え、観光の町へと次第にその姿を変え、奈良人形や鹿角細工、奈良漬などのいわゆる土産物が登場していきました。

民間信仰と伝統行事

奈良町では、春日大社の「春日若宮おん祭」や東大寺の「修二会」などのように、中央の権力の影響を受けながら神社や寺院が中心となって盛大な祭礼や行事が行われ、一方では各地の神社や寺院においても地域住民を中心として、多くの祭礼や行事、法要などが受け継がれています。

また、かつて奈良町には氏神と氏子町、町寺と檀家という形だけではなく、町人の信仰生活は町全般にわたって存在し、職業仲間によって結ばれた春日講や伊勢講などの仏教関係の講による信仰や、組織化されずに人々が群参する形の民間信仰も多数みられました。こうした民間信仰の多くは、社会背景や生活様式の変化などを受けて失われてしまいましたが、地域に祀られる神仏と住民は歴史的に深いつながりを持ち、今でも地域の人々が中心となって古くからある町の共同体によって連綿と受け継がれています。

奈良町で行われている主な民間信仰

民間信仰	場所	行事等
地藏信仰	奈良町会所及び地藏堂（奈良町の各町）	7月23日：地藏まつり
	福智院（福智院町）	7月23日：地藏盆
	伝香寺（小川町）	7月23日：地藏会（着せ替え法要）
	十輪院（十輪院町）	7月23日：地藏会
	元興寺極楽坊（中院町）	8月23・24日：地藏会
えびす信仰	南市恵比須神社（南市町）	1月5日：南市初戎
	率川神社（本子守町）	1月5日：本子守町初戎
	北市恵比寿神社（北市町）	1月10日：北市十日戎
庚申信仰・庚申講	庚申堂（西新屋町）	3月第2日曜、11月23日：庚申まつり、庚申講
観音信仰・観音講	井上町会所（井上町）	毎月17日：月例観音講
	芝辻町集会所（芝辻北町）	観音講
念仏講	徳融寺（鳴川町）	11月15日：サンハライ念仏（子供念仏踊り）
春日信仰	東城戸町会所（東城戸町）	1月11日：春日講
	北京終町会所（北京終町）	1月21日：新日講
	西木辻公民館（西木辻町）	日程不明：親日講（錦町）
大日如来信仰	白山神社及び元興寺町会所（元興寺町）	毎月18日：大日講
弁財天信仰	餅飯殿町会所（餅飯殿町）	7月6日：弁天祭

奈良町が成立した当時、各町には会所がありました。奈良町の会所は、門前郷の各所の祠や堂に町の人たちが集まり、町の会所として独立させていったことに始まります。会所は、町の日常の諸事を処理し、町掟や町式目、町定などの町のしきたりを話し合う場であるとともに、幕府や奉行からの通達が読まれ、相互確認される行政の場であり、各町が管理運営し、町人の自治の場として大きな役割を果たしてきました。

また、会所には神仏が祀られ、その神仏の信仰を通じて町民の連携が一層強められてきました。特に、地藏尊が祀られる会所が多く、庶民にとってはもっとも手近な信仰である地藏信仰が今でも受け継がれており、とりわけ毎年7月23日～8月23日頃には各所で地藏盆や地藏祭が行われています。このように、奈良町の会所は民間信仰の中心であるとともに、地域コミュニティの拠り所であり、町民の生活と一体のものとなって存続しています。

現在の奈良町の会所と行事一覧（出典：「奈良町の会所－うけつぐ祈りとつどい－」）

	町名	施設名称	護持神仏	行事
1	雑司町	雑司町会所	地藏尊	新年会、地藏まつり、月例八幡祭
2	手貝町	手貝町会議所	地藏尊、弁財天	花祭り、弁天祭、地藏まつり、八鉄神社例祭
3	東包永町	東包永町会所	春日赤童子画軸、伊勢春日八幡神号軸	春日赤童子祭
4	今小路町	今小路町会館	八坂祇園神社	祇園神社祭
5	東笹鉾町	東笹鉾町会所	弁財天	弁天祭、大祭
6	中御門町	中御門町集会所	地藏尊、八坂祇園神社	地藏まつり、月例地藏講、祇園神社祭
7	押上町	押上町会館	八坂祇園神社	祇園神社祭
8	西包永町	西包永町第自治会会所	天満宮（菅公）、地藏尊	初詣、夏祭り、月例祭
9	北市町	北市戎神社	事代主命、春日明神	例大祭、春日講日待ち
10	芝辻北町	芝辻町集会所	観音尊	奇数月観音講
11	内侍原町	内侍原町会所	八島神社（春日・八幡神）	新年祭、夏祭り、月例祭
12	高天市東町	高天市蛭子神社	蛭子神、稻荷神	蛭子本祭、夏祭り、稻荷社火焚祭
13	西御門町	見初神社、観音堂	見初社（底筒男命、金山彦神他）、観音尊、地藏尊	見初者例祭、地藏まつり
14	中筋町	（集会施設近年消失）	勝手神社（木花咲耶姫）	例祭
15	東向北町	東向北コミュニティ会館	地藏尊	地藏まつり
16	鍋屋町	初宮神社	神祇官 8 神、伊勢・春日・住吉神	初詣、おんまつり田楽法師初度参り
17	今辻子町	（集会施設近年消失）	住吉神社（表筒男命）	大祭
18	下三条町	月日社	月日神社（早珠日神、満珠月神他）、弥勒尊、観音尊	夏祭り、観音講
19	角振町	隼明神	隼分命、地藏尊	大祭、地藏まつり
20	東向中町	東向コミュニティセンター	弁財天	弁天祭
21	南市町	南市町集会所	恵美寿神社（事代主命）	初戎祭
22	餅飯殿町	宗像神社、理源大師堂	弁財天、宗像三神、理源大師、役行者他	弁天祭、理源大師法要
23	勝南院町	住吉神社	住吉三神、蔵王権現、地藏尊	夏祭り、地藏まつり、月例祭
24	鶴福院町	鶴福院町会所	神仏画軸	夏祭り
25	東城戸町	東城戸クラブ	大国主神社（大国主命）	初詣、春日講、例大祭
26	西城戸町	西城戸町集会所	大日如来、観音尊、弁財天	弁天祭、大日如来祭
27	北風呂町	（集会施設近年消失）	宗像三神、弁財天	弁天祭
28	南魚屋町	富久神社	事代主命他	初戎、夏祭り
29	瓦町	瓦町会所	地藏尊、神（不明）	地藏まつり
30	西木辻中町	聖天堂+稲荷社 （西木辻公民館に統合）	歓喜天、孔雀明王、稲荷大明神	新年会、稲荷二の午祭、聖天夏祭り、聖天堂例祭
31	十三軒町	（西木辻公民館に統合）	地藏堂（地藏尊）	地藏まつり
32	瓦堂町	瓦堂町地藏講会所	地藏尊	地藏講、地藏まつり
33	脇戸町	皇大神宮社	天照大神、倭文大神、蛭子神	新年会、夏祭り
34	西新屋町	庚申堂	千駄地藏尊、吉祥天女、青面金剛菩薩	地藏まつり、月例地藏講、庚申講
35	元興寺町	元興寺町会所+白山神社	大日如来、白山権現	新年会、白山神社祭、月例大日講
36	井上町	井上町会所	観音、井上神社（井上内親王他）	新年会、井上神社祭、月例観音講
37	川ノ上突抜町	白山神社	白山権現	新年会、月例清掃、大祭
38	中清水町	中清水町地藏堂	地藏尊	地藏まつり、月例勤行
39	福智院町	（集会施設近年消失）	天神社（菅公他）	歳旦祭、夏祭り、秋祭り
40	笠屋町	地藏堂	地藏尊	地藏まつり
41	地藏町	（飛鳥公民館に統合）	地藏堂（多淵地藏尊）	新年会、夏祭り、月例祭
42	北京終本町	京終天神社務所	天神社（事代主命、菅公他）、境内社多数、地藏尊	新日講、地藏まつり、秋祭り、当夜座講
	北京終町	（天神社か）	不明（天神社か）	円式祭、節分祭、夏祭り、秋祭り、月原祭
43	川上町	川上西町自治会館	不明（近隣に五劫院あり）	
44	芝辻町	大田大明神	稲荷社	例大祭
45	西木辻八軒町	（西木辻公民館に統合）	地藏堂（地藏尊）	地藏まつり
46	法蓮町	法蓮町所（旧村会所）	阿弥陀如来画軸、地藏	阿弥陀講、春日講

【ポイント】

- ・中世郷民に始まり、江戸時代へと引き継がれる町会所を拠点とする自治の仕組みは、現在の自治会活動に受け継がれています。
- ・限られた土地や空間を生かした奈良町の町家には、隣近所の生活環境に配慮しながら中庭を配した建て方によって、プライバシーを守りながら快適な生活環境を確保するなど、多くの人々が快適な都市生活を送ることを可能にするための集住秩序が内包されています。このような生活の知恵や工夫が詰め込まれた町家が集合し、そこでの暮らしが継承されることで、奈良町の歴史的な町並みや住み良い生活環境が、現在に受け継がれています。
- ・寺社との関係が深い伝統行事や民間信仰、奈良の地場産業や工芸など、町家や町並みを舞台とした人々の営みが町の伝統と習慣をつくりあげてきました。これらは、現在に受け継がれ、歴史的・文化的な資産にあふれる環境をつくりだしています。

2-2. 奈良町のまちづくり

奈良町では、各地域の実情に応じたまちづくり活動が展開されてきました。そのなかでも奈良町のまちづくり活動の代表例として、ならまちときたまちでの取り組みを紹介します。

(1) ならまち

■ まちづくりのはじまり

昭和 50 年（1975）、全国的な歴史的町並み保存への関心の高まりを背景に、文化財保護法が改正され、新たに伝統的建造物群保存地区制度が成立したこの年、奈良市では都市計画道路杉ヶ町高畑線（北風呂町～鶴福院通り）を事業決定しました。当時の奈良市は、昭和 30 年前後の町村合併で新たに市域となった市西部の住宅地開発を優先したことにより、旧市街地は町自体が老朽化していました。また、「国際文化観光都市」を標榜する一方で、当時の観光の主流であった団体旅行・修学旅行の数が減少し、この頃から少人数でそぞろ歩きをする観光のあり方が見え始め、観光客と居住者に対応する新たな商店・観光のあり方への転換期を迎えていました。以上の背景もさることながら、自動車交通時代に対応すると共に木造町家が密集する市街地の防災街路としての整備を目的に都市計画道路杉ヶ町高畑線を計画しました。しかしながら、この事業決定は、道路拡幅工事に伴い、旧市街地の中でも特に旧奈良町の町家の様相を良く残している地区であったにもかかわらず、古い伝統的な町並みを形成している町家を取り壊すことを意味し、このことを警鐘するように、これを契機に奈良町の町並み保存や町家の研究に対する地域住民の意識の高まりが見え始めました。

昭和 53 年（1978）には、有志による勉強会である「奈良を考える会」が活動を開始し、翌年、奈良町の町並みの保全・再生と活性化を目的とした同会を母体とする任意団体である「奈良地域社会研究会」が設立されました。この団体の設立は今後のならまちのまちづくりの先駆けとなり、その後、昭和 59 年（1984）に社団法人格を取得し、「社団法人 奈良まちづくりセンター」（以下、「まちづくりセンター」という。）を設立し、全国でも先駆的な市民主導行政支援型によるまちづくり活動を進めてきました。その当時は、かつて非常に活気のあった町が、戦後間もなく若者が外へと

出ていくことにより衰退化していき、空き地を地上げ屋が買い占める事態に陥っていました。そこで、町の活性化と町並みの保存をコンセプトとしてまちづくり運動を始め、彼らは住民の暮らしを第一とし、町並み保存をベースとするまちづくり運動の結果として観光客が訪れることによる経済効果も期待するという方針で活動展開を行いました。その後、昭和 60 年（1985）には元興寺周辺の地縁組織を母体に地域住民によって発足された「奈良町まんだら会」（平成 2 年（1990）に「奈良町倶楽部」（現：奈良町座）に発展）等の数々の民間による活動団体が組織され、町並み保存のための取り組みや、奈良町フェスティバル（昭和 56 年（1981）第 1 回開催）などのイベントを開催し、こうしたイベントは住民のまちづくり参加の機会づくりや町への愛着を高める意識づけの機能を果たしました。また、奈良町資料館（昭和 60 年（1985）開館）や奈良町オリエント館（昭和 63 年（1988）開館）のように古い町家が改修・整備され、民間による地域の展示施設等として活用されるようになり、このような動きは町家を残していくための活用の先駆的な事例となりました。

一方、奈良市においても、昭和 63 年（1988）から奈良市町並み保存事業費補助金交付事業を開始し、町家の修理・修景に対して補助金を交付するとともに、このような民間団体の動きを受けて、歴史的町並みの保全を図るため、昭和 57 年（1982）から 4 年をかけて伝統的建造物群保存対策調査を実施し、伝統的建造物群保存地区の指定に向けた取り組みを開始しました。

■ 奈良町博物館都市構想とならまち賑わい構想

昭和 62 年（1987）、奈良市が J R 奈良駅地区の再開発構想を発表すると、市民から反対運動が起きました。再開発構想を推し進めるため、奈良市は、平成元年（1989）に世界建築博覧会の開催を発表しました。それでも反対運動が続いていた折、10 年間の町並み保存運動を積み重ねていた「まちづくりセンター」は、この機を逃がしては奈良町の町並み保存をなし得ないとの判断で、当時の第 19 代市長である西田市長に奈良町博物館構想の素案を提案しました。その後、奈良市は正式に「まちづくりセンター」に委託をして、同年 12 月に「奈良町博物館都市構想」（以下、「博物館構想」という。）を策定しました。市は、「まちづくりセンター」からの提案を受け、同博覧会のテーマを「歴史と未来の共生」とし、従来の仮設型のイベントではなく、J R 奈良駅周辺とならまちの 2 会場において建設及び保存整備のまちづくりそのものをみてもらうものと位置づけ、保存と開発のバランスを取ることにしました。このときはじめて、奈良市として奈良町の町並み保存に対する価値や意義を政治的に意思決定したといえます。平成 3 年度に、居住環境整備街路事業調査を実施した後、平成 4 年（1992）1 月に、同調査ならびに奈良町博物館構想のエッセンスを取り入れて行政計画として再編成した構想を策定しました。これが、「ならまち賑わい構想」（以下、「旧構想」という。）です。

世界建築博覧会の開催は、バブル崩壊による不景気に見舞われ、開催予定年の平成 10 年（1998）になっても整備が進まず、平成 6 年（1994）には開催時期を平成 22 年（2010）までに変更するも、平成 11 年（1999）ついに開催そのものが中止に至りました。また、西田市長退任後、平成 4 年（1992）9 月 28 日に大川市長が就任すると、平成 16 年（2004）9 月 27 日の退任を迎えるまで大川市長のもとで旧構想の実現に向けた事業が進めていきました。公共施設整備は、未整備に終わった（仮称）ならまち郷土館と平成 12 年（2000）完成のなら工藝館を除く施設は、目標年度とする市制 100 周

年を迎える平成 10 年（1998）までに完了し、同年 12 月 2 日には「古都奈良の文化財」が世界文化遺産に登録されました⁷。しかし、市政運営の根幹となるまちづくりの目標を明らかにし、これを達成するための基本方針を示すものとして、平成 13 年（2001）2 月に策定された奈良市第 3 次総合計画に旧構想を位置づけることはなく、その後、平成 24 年（2012）年 2 月に策定された奈良市第 4 次総合計画や奈良町を対象区域に含む各種計画等にも位置づけることはありませんでした。

このように、世界建築博覧会との兼ね合いで意味を持った博物館構想も、西田市長退任後は市の政策的な位置づけは行わずに、博物館構想の意志を受けた旧構想も同様に、市の政策的な位置づけが行われることなく事業を展開していき、旧構想の概念や考え方は行政においても、地域においても共有されることはありませんでした。

～ 『奈良町博物館都市構想』の概要 ～

（平成元年（1989）12 月策定）

まちづくりの 基本的な考え方		① 日本文化のルーツ都市としての再評価 ② 奈良市のもうひとつのアイデンティティ都市をめざす ③ 生活文化都市をめざす ④ まち中産業としての奈良町産業を興す ⑤ 関西、全国のサロン交流都市をめざす ⑥ 住民による手づくりのかいわいづくり
構 想 の 基本的な 考 え 方	対象地域	元興寺かいわい、清水通りかいわい、高畑かいわい（1998 年の世界建築博覧会にターゲットを合わせる）
	整備 イメージ （目的）	・生活、なりわいの息づかいが伝わりとともに、人々が奈良町の歴史、文化に楽しくふれ、生活の知恵や伝統の素晴らしさに酔いしれる事の出来るまちづくりを目指す。 ・町に住む住民が自分の町に誇りを持つとともに、来訪者との心の交流が出来る生活文化交流サロンとしての博物館、美術館、ギャラリー等を各町に必ず一個開設する「1 町 1 博物館運動」を住民レベルから興す。
	構想整備の 3 つの柱	・博物館ネットワーク ・工房ネットワーク ・サロンネットワーク
	町並み保存・景観形成と運動 うら空地の利用	
施設整備	メイン整備 ゾーン	北室町、中新屋町、芝新屋町、西新屋町、高御門町、脇戸町、陰陽町、鳴川町
	施設の内容	・奈良町博物館を、奈良町博物館都市構想推進の戦略本部的役割と、整備されていく諸施設（サテライト館）や寺社などの既存関連施設の総合的ネットワークセンター（中央館）として、奈良工芸・クリエイティブ館と奈良国際交流サロンをサブセンターとして位置づける。 ・奈良工芸・クリエイティブ館は、工芸、工房関連諸施設のセンターとしての役割を果たす。 ・奈良国際交流サロンは、高畑文化村や奈良町迎賓館とのセットワークセンターとして奈良の人脈づくり、奈良ファンの固定化づくりに貢献する。
その他の 整備	環境整備	・町並み景観形成 ・道路整備計画 ・サイン計画
	インフォメーション計画	
	イベント計画	
推進・ 支援体制	基本的な 考え方	「公共サービスの処理方法別供給主体の概念図」にもとづいて、それぞれの分野に適する事業やサービス内容の検討と主体の形成をはかる
	推進事業体	・株式会社奈良町公社の設立 ・奈良町博物館都市推進協議会の設立（地域に根ざした民間地域住民主導行政支援型のまちづくりの推進、地域住民・博物館施設関連・工房関連・その他奈良町関連の諸団体と行政で構成） ・奈良町博物館都市整備プロデュース機構の設立
	支援体制	奈良町まちづくり基金の設置
	行政の役割	・土地開発公社を利用して、博物館、駐車場等の用地の先行取得 ・環境整備の実施 ・奈良町まちづくり基金への拠出 ・株式会社奈良町公社への出資と支援

⁷ 登録に向けた推薦書には、緩衝地帯及び歴史的環境調整区域の管理として、古都奈良の景観を一体的に保全するための制度体系（奈良市都市景観条例）が整えられ、奈良らしさを守るため、きめ細かい規制誘導を行うと共に、公共・公益施設の整備による景観形成を推進することなどが挙げられた。

■ まちづくりの過渡期

旧構想の策定後も、奈良地域社会研究会から始まる民間団体によるまちづくり運動の流れは続き、この頃から住民のならまちに対する評価や誇りが高まりを見せ、活動の成果が住民の意識の変化にも表れるようになってきました。平成4年(1992)には地域に根差した「現代の町家」づくりを目指した建築家を中心とした「なら・町家研究会」、平成7年(1995)には奈良町倶楽部の有志による「^{くるま}俵座」(平成11年(1999)にNPO法人さんが俵座、平成12年(2000)に(有)さんが奈良町へと展開)などの団体が相次いで組織され、それら団体の活動拠点として町家を改修・整備してきたノウハウが一般の住宅や店舗にも活かされ、町家の意匠を意識した建物が建てられるようになりました。また、民間団体による町並み保存とまちの活性化の動きは、ならまちで何かをしたい、ならまちの活性化に貢献したいという強い思いを持つ人を惹きつけ、ならまちで町家を利用した店舗等が展開されるようになりました。その成功は古くから営まれてきた商店の業種業態を変化させながらも、地域のまちづくりのエネルギーの高まりにつながっていきました。

このように、現在のならまちは、町並みを保存し、活性化させようと次から次へと自発的・自生的に生まれたまちづくり団体の活動の成果であり、旧構想に基づく行政の文化的施設の投資と、民間の自発的なまちづくりのエネルギーの相乗効果によりまちを活性化したことができます。

一方、平成17年(2005)8月1日第21代市長に就任した藤原市長は、平成16年(2004)4月に設置された「奈良市ボランティア・NPOとの協働のあり方に関する検討委員会」において検討を重ね、平成18年(2006)2月に「奈良市ボランティア・NPOとの協働のあり方に関する指針」を策定し、地域社会における「協働」の必要性を強調し、協働により施策を進めていくという市の方針を示しました。そして、その指針を受けて平成21年(2009)6月には、「市民参画及び協働によるまちづくり条例」を制定しました。

(2) きたまち

■ 「きたまち」のはじまり

大宮通以北の旧奈良街道筋には、かつて^{はたご}旅籠や商店等の町家が建ち並び活気が溢れていましたが、少子高齢化の影響や、商業施設の郊外化等の影響から閉店する商店も多く、かつての活気が失われてきました。そのような現状から、子どもたちが将来にわたって、安心して楽しく暮らし、またこの町を愛し、町に誇りを持つ人々を少しでも増やすとともに、地元住民が中心となって、そこに生活する住民の声を行政と一緒にあってまちづくりに反映させることを目的として、平成10年(1998)8月24日に地元住民によるボランティア団体として「奈良街道まちづくり研究会」(通称: まちけん。以下「まちけん」という。)が発足しました。彼らは「喜びが多い町」「何か懐かしい来たことがある町」「再び来たい町」という思いを込めて、大宮通から北側の部分を「きたまち」と名付けました。これこそが“きたまち”のはじまりといえます。

「まちけん」のメンバーは自営業や公務員等、さまざまな業種にわたり、発足以降、近鉄奈良駅より北側一帯をエリアとする「奈良きたまち計画」を掲げて、各種調査やイベントを開催し、情報発信をしてきました。そのような取り組みの中で、彼らは永禄3年(1560)松永久秀が眉間寺山(現

若草中学校)に築城した多聞城に着目し、その価値を子どもたちに継承していくために、城の復元を最終目標としながら、多聞城を核としたまちづくりを続けています。

■ 「なべかつ」「てんかつ」の活動

「まちけん」によるまちづくりイベントが開催されるなか、奈良女子大学正門の斜め南側にあり、近鉄奈良駅からみたときにきたまちの入り口に立地する奈良警察署鍋屋連絡所が平成16年(2004)閉鎖されることとなりました。大学に隣接し、地域でも親しまれていたこの建物の保存、活用に向け、平成18年(2006)4月から奈良女子大学で検討が開始されました。その後、平成21年(2009)2月から3月にかけて、鍋屋連絡所の保存に思いを寄せる地域住民や市民、地元の自治会長、当時きたまちで活動していた「まちけん」メンバー等の大学外の人も集まり相談が始まりました。この集まりで最初に確認されたことは、「地元住民を中心に奈良女子大学、市民が共同して地域の安全・安心拠点や地域の街づくり拠点等、地域の発展に寄与する施設として活用するとともに、大学としても教育・研究に活用しよう」ということでした。そして、そのための体制づくりを行うこととなり、「きたまちに住んでいる方々の生活を大切にし、きたまちの歴史を活かした街づくりを進めるために旧鍋屋連絡所を保存・活用できるよう活動すること」を目的に同年4月に「旧鍋屋連絡所の保存を考える会」が発足しました。('旧鍋屋連絡所の保存を考える会'は、平成22年(2010)6月名称を「鍋屋連絡所の保存・活用と“奈良きたまち”のまちづくりを考える会」に改正。会の目的も「鍋屋連絡所の保存・活用」と「きたまちのよさを活かした街づくりを進める」の2つになる。(通称：なべかつ)以下、「なべかつ」という。)

「なべかつ」では、きたまちのよさを広める活動として、なら・観光ボランティアガイドの会などと共催したきたまちの見学会や「奈良八重桜巡り」、きたまちをフィールドにした「スケッチ大会」、奈良国立博物館の正倉院展に合わせてきたまちの一角でもある正倉院ときたまちを案内する「正倉院探訪」、きたまちに^{ちな}因んだテーマについて講師を招いて行う「きたまち大学校」などの活動を展開する一方、旧鍋屋連絡所の土地と建物については市が取得・改修し、平成24年(2012)7月「旧鍋屋交番きたまち案内所」(奈良市きたまち鍋屋観光案内所)として開所しました。市と「なべかつ」が協定を締結し、「駐在さん」と呼ぶボランティアが常駐して「なべかつ」が建物の活用を行うことになりました。このように、「なべかつ」の活動は、きたまちのよさを活かす活動と合わせて、建物の活用についてもきたまちの種々の案内やまちづくりに参画したいという住民や市民、研究・教育としても活用したいという大学(及び学生)など、それぞれの立場での意欲をお互いに活かし合う新しい取り組みとなってきました。

平成20年度には、地元の自治会長等による「転害門前旧銀行跡建物協議会」(通称：てんかつ。以下、「てんかつ」という。)が設立され、昭和15年(1940)に建設され、昭和47年(1972)まで使用されていた旧南都銀行手貝支店を観光案内所や観光客の休憩施設、観光情報を発信するギャラリー機能を持った施設としての活用に向けた「世



旧鍋屋交番きたまち案内所



きたまち転害門観光案内所

界遺産東大寺転害門に隣接する町屋活用基本構想」が策定されました。その後、市の用地取得、改修を経て、平成 25 年（2013）5 月に「きたまち転害門観光案内所」が開所し、市からの委託により「てんかつ」が管理運営を行っています。

また、これら観光案内所は、地域住民等が中心となって運営を行うなかで、観光案内のみならず、地域のまちづくりの拠点としても重要な役割を担っています。そして、平城京以来 1300 年の歴史がモザイクのように折り重なるきたまちにおいて、「なべかつ」、「てんかつ」以外にもきたまちの歴史的な価値を活かしながらまちづくりに関わる商店や個人の種々の動きも始まっています。

■ 地域住民が中心となったまちづくり

「まちけん」は、まちづくりに関するイベントだけでなく、地域の大切な資源として川の清掃や、子どもたちを対象とした絵画展等の活動を展開しています。また、「なべかつ」は住民の生活を大切にしながらきたまちの良さを活かしたまちづくの活動として、きたまちの良さを再認識する企画や、地域資源を題材としたスケッチ大会等の活動を行っています。

このように、きたまちでは、「住民の生活を大切にする」という立場で住民が中心となったまちづくりが展開され、環境、教育、福祉、防災・防犯に関するさまざまな取り組みが行われています。

（３）今後の展望

J R 京終駅（南京終町）は明治 31 年（1898）に建設された木造の駅舎であり、今は無人駅になっていますが、どこかノスタルジックな雰囲気漂わせており、地元からも保存や駅を中心とした活性化に向けた動きが進められています。

また、明治 41 年（1908）に建築された煉瓦造の奈良少年刑務所（般若寺町）は、明治 34 年（1901）不平等条約改正後の監獄の全国的再編成として建てられた 5 大行刑施設（千葉、長崎、鹿児島、金沢、奈良）のうち、唯一建物全体が現存しているものであり、その意匠や技術の高さに注目されています。老朽化のため平成 28 年度末で閉鎖される予定ですが、その歴史的価値から建物を保存し、閉鎖後の活用に向けた動きが進められています。

さらに、鶴福院町では行政による道路拡幅事業計画を契機として、地元自治会で研究会を開催し、住民によるまちづくりを進めています。

このように、奈良町には守り、後世に残すべき貴重な資源が数多く残されており、これらの保存・活用をきっかけとしたまちづくりの萌芽が数多く見え始めています。今後これらの資源を地域で大切に守りながら、誇りに思い、地域住民がその思いを共有してまちの魅力を高めていくまちづくりが展開されることを期待したいものです。

【ポイント】

- ・奈良町では地域の歴史的資産を守り受け継ぐことを共通の目的として市民・住民主導のまちづくりが展開されています。
- ・ならまちのまちづくり活動は、全国でも先駆的事例として周知されています。
- ・きたまちでは、地元自治会や有志によるまちづくり団体が中心となったまちづくりが展開されています。

2－3．未来に受け継ぐ奈良町の価値

「未来に受け継ぐ奈良町の価値」とは、奈良町の住民や奈良市民の誇りとして、将来に守り伝えたい、あるいはこれからの暮らしやまちづくりに活かしたいと思えるような事柄です。「2－1．奈良町の成り立ち」と「2－2．奈良町のまちづくり」の整理を踏まえ、「未来に受け継ぐ奈良町の価値」は、「歴史文化」、「暮らし」「生業」^{なりわい}「観光」「まちづくり」の5つの視点から、次のように整理できます。

（1）悠久の歴史的市街地に町家・町並みの生活文化が受け継がれていること 【歴史・文化】

奈良時代、わが国の政治・文化の中心として栄えた平城京。その外京の町割を基盤に成立・発展してきた奈良町は、わが国最古の歴史都市であるといえます。奈良時代に置かれた興福寺、東大寺、元興寺、春日大社には、世界文化遺産にも登録される貴重な建造物が残り、その周囲には、かつての平城京の条坊を踏襲しながら、また一部寺域を侵食しながら中世以降に形成されてきた市街地が広がり、近世以降に建てられた数多くの町家が連なることで、歴史的な風情を感じさせる町並みとともに、中庭が連続する良好な居住環境を形成してきました。そして、そこに受け継がれる祭りや行事、信仰をはじめとした生活文化には、古くからの地域住民のつながりと同時に、世界文化遺産とともに生きる町としての大社寺との深い関わりを感じることができます。

奈良町には、その1300年にわたる長い歩みのなかで、各時代の歴史が刻まれ、文化が蓄積されてきました。その結晶こそが現在の奈良町の歴史・文化環境です。そして、その歴史文化環境がつくる「時間的価値」と「空間的価値」⁸は、奈良町の町家・町並みの生活文化に凝縮されているといえます。

（2）心を豊かにする快適な暮らしの場が形成されていること 【暮らし】

奈良町は、奈良の中心市街地として発展するなかで、鉄道駅が置かれ、商業・業務施設などが集積し、生活利便性を高めてきました。一方で、若草山、春日山原始林などの奈良公園の豊かな自然環境は、町家が連なる町並みに潤いを与えるとともに、その背景となって歴史的な風情を際立たせています。また、奈良公園は町なかに暮らす人々が気軽に足を延ばしてくつろぎ、憩える場となるとともに、一方では、奈良公園から町なかへと時折鹿が顔を出し、人々と鹿との共生・共存の歴史を感じることができます。また、身近に残る世界文化遺産や古くからの郷のコミュニティを母体とした人と人との温かみのあるつながりを通じて町の歴史・文化の奥深さを感じることもできます。このようなしっとりとした雰囲気と歴史・文化の奥深さが、近代以降の多くの文人墨客を集める背景にもなってきました。

このように、奈良町は、高い生活利便性と同時に、近接して奈良公園の広大かつ豊かな自然が広がる稀有な環境、そして1300年の悠久の歴史・文化が、暮らす人々の心を豊かにする快適な暮らしの場をつくり出してしています。

⁸ 「時間的価値」とは、奈良町の歴史の事象、あるいは歴史の歩みの中から読み取れる価値であり、「空間的価値」とは、歴史の歩みとともに形成された歴史的市街地の構造から読み取れる価値である。

（３）我が国を代表する歴史都市型のコンパクトシティであること 【生業】

寺社の門前郷として形成された奈良町は、中世から近世、近代へと、商工業、観光産業を発展させてきました。そのなかで育まれた墨や奈良筆、鹿角細工、奈良人形一刀彫、奈良団扇、漆器、酒、奈良漬などは、奈良町の伝統的な工芸・産業として現在にも受け継がれています。

このように、奈良町は閑静なベッドタウン（住宅市街地）ではなく、暮らしの場としての性格と同時に、そこで仕事をし、生業・商売が成り立つ職住一体・職住近接の町としての性格を併せ持っています。数多くの町家が残る歴史的市街地において、観光のみならず、交通や商業・業務、教育、福祉などのさまざまな機能が集積し、生活・生業の場として成り立つ奈良町は、わが国の歴史都市型のコンパクトシティのモデルにもなり得るポテンシャルを有しているといえます。

（４）暮らしと調和する観光が息づいていること 【観光】

世界文化遺産を有する奈良町には、国内外から多くの観光客が訪れる一方で、生活の場として、人々の豊かな暮らしが繰り広げられています。奈良町では、「生活」と「観光」とが相対するものではなく、それらを融和しながら相互に成り立たせ、それぞれに魅力を高め合う関係が築かれてきており、奈良町観光のひとつのブランドとして定着しつつあります。それは、ゆったりとした時間の流れのなかで、奈良町の歴史を学び、そこでの暮らしや文化を体感することによって得られる安らぎと感動、郷愁が、人々を再び奈良町へと誘い、ひいては奈良町に住みたいと思わせるような観光であり、豊かな自然に抱かれた地に広がる世界文化遺産とともに生きる奈良町だからこそ成し得る観光の姿であるといえます。

（５）地域住民主導のまちづくりが活発に展開されていること 【まちづくり】

中世郷民に始まる住民による自治の精神や伝統は、現在の奈良町を構成する各町の自治会活動はいうまでもありませんが、「ならまち」、「きたまち」などで展開される多様なまちづくり活動に着実に引き継がれています。

自治会活動や市民・住民による自主的なまちづくり活動は、奈良町の歴史・文化・伝統、町家・町並みの生活文化などを後世に守り伝えていくエネルギーの源です。また、それらの活動を支える行政の支援も不可欠で、地域の諸活動と行政との連携・協働によるまちづくりがより強化される必要があります。